

野口昇先生のご退職にあたって

学 長 川 邊 信 雄

野口昇先生は、2013年3月をもって文京学院大学を退職されます。先生をお送りするのは大変残念ですが、先生の輝かしいご功績をたたえとともに、これまでの本学に対する多大なるご貢献に対して、心から敬意と感謝をこめて、ここに「野口昇教授退任記念号」として本紀要を刊行し、謹んで先生に献呈いたします。

野口先生は、1939年3月31日に岐阜県飛騨高山でお生まれになりました。東京大学教育学部在学中に国家公務員採用上級甲種試験に合格され、同学部を1961年3月に卒業され、翌4月に文部省に入省されました。文部省では一貫して学術国際局の仕事を担当されております。とくに、1981年4月に学術局ユネスコ国際部企画官に就任され、日本のユネスコへの協力の基本政策を立案されたり、ユネスコの総会・執行委員会・文部大臣会議など主要会議に出席されたりしています。その後、国連大学特別連絡担当官、日本学術振興会事業部長、文部省大臣官房付などの要職を歴任されました。

1992年9月には、パリのUNESCO本部フェローシップ・機材調達部長としてユネスコ・フェローシップ・バンク計画を企画され軌道に乗せられています。また、1997年3月には、UNESCO北京事務所長に就任されるとともに、中国・モンゴル・朝鮮民主主義人民共和国への代表を兼ねられました。2001年6月から現在に至るまで社団法人日本ユネスコ協会連盟理事長として、また2002年12月から8年間文部科学省・日本ユネスコ国内委員会委員として活躍されています。まさに野口先生は、UNESCOを中心に国際舞台で「日本の顔」として大いなる活躍をされてきたといえます。国際的な文化交流の分野では日本を代表する実務家でもあり研究者でもあり、国際会議やシンポジウムでの報告など八面六臂の活躍をされています。

2001年4月にご縁で文京女子大学（2003年4月より文京学院大学に校名変更）外国語学部教授に就任され、国際舞台での実務経験を生かされ、「Conference English」「国際文化協力」「国際関係論II」「地域研究II（アジア）」「ゼミナール」「卒業論文」などの科目を担当されました。2002年4月から2012年3月まで、文京学院大学の副学長も務められています。文京学院ではその他、外国語学部長、大学院外国語学研究科委員長、国際交流センター長、特任教授、さらには文京学園の理事、評議員もお務めいただいております。米国をはじめとする海外提携大学と国際連携プログラムも、野口先生が中心となって作り上げてきたものです。まさに、学園、大学の教育研究のみならず、大学の国際化に尽力をしていただきましたし、学園、大学の運営にも貢献をしていただきました。

以上のような幅広い活動をされているなか、野口先生は精力的に研究・執筆活動を行ってこられました。一端をご紹介しますと、ユネスコの概要とその歴史をみた社会的評価の高い『ユネスコ50年の歩みと展望』(シングルカット社、1996年)があります。また、共著では『ユネスコ30の質問』(社・日本ユネスコ協会連盟)、その他があります。さらに、『パリ 四季と生活』(高山市民寺宝者、1997年)などの機知にとんだエッセイ作品は、野口先生の人生経験の豊かさと博識ぶりを表すものです。

私自身の野口先生の思い出や印象を少し述べさせていただきたいと存じます。やはり、野口先生の本領発揮は、海外の協定校との手紙のやり取り、また外国からのお客様が本学を訪問されたとき、さらには国際連携プログラムの開講式や修了式などにおいてでした。野口先生が英語で書かれたりスピーチをされたりするときには、その文章の完璧さ、内容の深さ、そして話しぶりから外国のトップに勝るとも劣らない、正真正銘の国際人という印象を受けたものです。同時に、先生はいつも大変おだやかで誰にでも優しくされておりますが、ご自分に対しては大変厳しい方だと思います。また現在でも、学生をインドやカンボジアなどにボランティア活動のために連れていかれています。このパワーは、いったい何処から生まれるのか不思議でたまりません。

現在、本学では時代の変化に対応するために、グローバル人材を育成する目的で、「新・文明の旅プログラム」や「文京GCI」のといった計画を実現しつつあります。まさに、この分野では野口先生が開拓者の役割を果たしてこられました。実際、先生の薫陶を受けた学生の多くが海外に羽ばたいています。本学でも、先生の多方面にわたるご業績を引き継ぎ、先生のようにグローバルに活躍できる人材の育成・輩出を、今後とも目指して努力をしていきたいと考えております。

野口先生には、大学の発展と学生の教育支援、グローバル化に多大なご貢献をいただきました。改めて、衷心より感謝申し上げます。次第です。

野口先生の今後のますますのご健勝とご活躍をお祈りいたしますと同時に、先生には引き続き私たちをご指導下さるようお願い申し上げます、ご退職のお祝いの言葉とさせていただきます。

2013年1月吉日